

死者について物語る

——イーデン・ロビンソンの『モンキー・ビーチ』における記憶と忘却——

戸田 由紀子*

A Story about the Dead

—Memory and Forgetting in Eden Robinson’s *Monkey Beach*—

Yukiko TODA

1970年以降、同化主義から多文化主義へカナダ政府が政策を移行したことによって、先住民やマイノリティに対する関心が高まり、彼らが発する言葉（文学作品も含めて）への関心と需要が生まれた。その結果、先住民に対する数々の不当な扱いや第二次世界大戦時における日系カナダ人の強制収容など、国家の正史が「忘れようとしてきた」負の過去が明らかになり、国による公式謝罪へと至った。1988年には日系カナダ人への謝罪、そして2008年には先住民に対する謝罪が続いた。

またそれと並行して、日系収容所や寄宿学校の生存者たちの声を残し、アーカイブ化する動きも出た。日系収容所体験者の声は、数多く録音され、一般公開されている¹⁾。また、寄宿学校の生存者の声は、2008年に設立された真実和解委員会による調査を通してアーカイブ化された。真実和解委員会は、6年にわたり約6740人の寄宿学校の元生徒（“survivor”）とその家族にインタビュー調査を行い、2015年の6月2日に最終報告書概要を、さらに同年12月15日に最終報告書を発表し、政府に対して和解と改善を求めた。生存者たちが少なくなってきた今日、アーカイブ化することはますます重要である²⁾。

アーカイブ化されることで体験者たちの声が記録できる一方で、アーカイブ化すること自体が目的と化し、現在も尾を引いている問題から目をそらしてしまう恐れがある。ロイ・ミキが指摘するように、カナダの歴史の一部として記録され、記憶されることで、過去の「解決済み」の歴史的イベントの1つとして処理されてしまうのだ。その結果、失業率、貧困、アルコール・薬物中毒、自殺、DV、先住民女性の行方不明問題、性的虐待問題、教育の問題といった先住民が抱える現在のさまざまな問題が、500年にわたるユーロカナディアンによる植民地化の歴史に根ざしているという重要な点が抜け落ちてしまう。

1884年から1996年まで100年以上続いた「寄宿学校制度」は、現在先住民が抱えるさまざまな社会問題を引き起こした最大の原因といえる。19世紀末、政府は先住民に対する法的、経済的援助を軽減し、先住民の土地や資源を支配できるようにするために寄宿学校制度の実施を開始した。15万人以上の先住民の子供達を親元から離し、教会が運営す

* 国際コミュニケーション学部 国際言語学科

る寄宿学校へ入れ、子供たちが生まれ育った言葉、文化、宗教を禁じ、英語とキリスト教を強要した。「文化的ジェノサイド」と呼ばれるこの寄宿学校制度は、霜鳥も言及するように、まさにグギの言う「文化の爆弾」そのものだ（霜鳥8-9）。グギは自著 *Decolonizing the Mind* で、植民地にもたらされる最大の悲劇は、文化に対する植民地化、すなわち、「文化の爆弾」だと説明する（Ngũgĩ 3）³⁾。グギは、経済的および政治的な植民地化は、それと並行して推し進められる文化の植民地化なしには成り立たないと説明する。宗主国の言葉で教育することで、植民地の人々は母語ではなく、習得した宗主国の言葉で世界を認識するようになる。言葉を習得するということは、その言語に内抱されたヨーロッパ中心主義的な世界観を習得するということ、また、そのレンズを通して自分たちを評価するようになってしまうことである。つまり、先住民よりも白人のほうが優れているという白人優位の価値観に根付いた言葉で、自己を評価するようになるということだ。寄宿学校制度も、白人優位の価値観の前提のもと、「子供の中のインディアンを殺す」ことを目的とし、先住民の自尊心への徹底的なダメージを与えた。先住民の伝統文化や世界観が恥ずべきものだと教育され、母語を失った子供達は卒業後コミュニティに戻るが、親や親戚と以前のようにコミュニケーションが取れないことに気づく。一度切断された文化やコミュニティは、寄宿学校制度が終わった後も元に戻ることはなく、現在先住民が抱える数々の問題が示すように、さまざまな形で尾を引くことになったのだ。

イーデン・ロビンソンの『モンキー・ビーチ』は、主人公リサ（Lisamarie Michelle Hill）が弟ジミー（Jimmy Hill）の失踪の真相を探る推理小説仕立ての物語である。リサがミステリーのパズルを組み立てる作業を通して、ジミーの事件がより深い歴史に根ざしていることが露呈する。本論では『モンキー・ビーチ』が、主人公リサが死者たちを想起し、死者の世界に旅をし、そして死者の記憶を引き継ぐ物語であることを示し、それによって、現在の問題が過去の「文化の爆弾」と複雑に繋がっていることを読者に効果的に意識させることをみていきたい。

死者について想起する物語

主人公リサは、カナダのブリティッシュコロンビア州キタマットに住むハイスラ族の一員である。物語はリサの弟ジミーが漁の最中に突然消息を絶ったという知らせを受けるところから始まる。ジミーの遭難した場所まで向かう途中、リサはこれまで失った大切な人たち、祖母のマ・マ・ウー（Ma-ma-oo）と叔父ミック（Mick）のことを思い出す。

リサは、彼らと一緒に過ごした楽しい思い出だけではなく、どのような死に方をしたか、その具体的な状況を想起する。ここで「記憶」がそもそも「死者について語るということから始まっている」（岩崎 35）という岩崎の指摘に触れたい。岩崎は、キケローの『弁論家について』の「記憶」の章で紹介されている記憶術の始祖として名高いシモニデス（BC556-468）のエピソード（キケロー 93-94）を紹介しながら、「記憶術」というものが死んだ人たちの具体的な状況を思い出す行為から始まったことを指摘する。死体が誰なのかをその配置から判断することができた経験から、「秩序だった配置こそ確実な記憶にとって必要不可欠」（岩崎 35）だと考え、それが記憶術の発明に繋がったとのことである。

そのシモニデスの経験とは、次のような話である。あるときテッサリアの貴族スパコス

が祝宴を催し、詩人だったシモニデスは依頼されて主人を称える詩を披露する。ところが朗読した詩が双子の神（カストルとポリュデウス）ばかり讃える内容であったため、スパコス気分を害してしまい、謝礼を半分しか払わず、残りはシモニデスが讃えた双子の神から貰うよう指示する。その直後、面会を求める二人の若者に会うためシモニデスがその場を離れて外に出たまさにその時、祝宴を開いていた大広間の天井が抜け、スパコスを含めその場にいた全員が下敷きになり、死んでしまう。シモニデスに面会を求めた二人の若者とは、朗読した詩で讃えた双子の神であり、その報酬としてシモニデスの命を救ってくれたというわけである。建物の下敷きになった人々の死体は損傷が激しく、誰の死体なのか全くわからない状態である。唯一生存したシモニデスは、生前誰がどの場所に座っていたかを思い出すことで、死体を引き取りに来た親族に遺体を引き渡すことができる。

シモニデスと同じように、リサはマ・マ・ウーとミックがどこでどのように亡くなったかを詳細に想起する。シモニデスのエピソードで、建物の下敷きになった人々の死体の損傷が激しく、誰がどの死体なのかわからなかったように、ミックとマ・マ・ウーも誰かわからないほど無残な姿で発見される。ミックは漁の最中網に引っかかり、溺死し、膨張した姿で引き上げられる。一方、マ・マ・ウーは家で焼死し、リサが駆けつけたときには、「髪の毛も皮膚もない、焼け焦げたベーコンの臭い」(293)を発しながら運び出される。損傷した遺体が誰のものなのかは、遺体からはまったく判断できない状態である。もしリサや身内の誰かによって特定されなければ、二人の遺体は誰からも認識されずに葬られることになっていたであろう。

それは白人と同等の価値を持っていない先住民にとって決して珍しいことではない。リサが白人男性にからまれ、抵抗したことで拉致されそうになったことをトゥルーディ叔母さんに伝えたとき、たとえ白人にリサが殺されていたとしても、犯人が罪を問われることはないと言われる場面がある。それほどリサの命は価値のかけらもないのだ。このエピソードは、誘拐されたり、レイプされたり、殺害されたとしても、事件としてすら取り上げられない今の現実世界を表わしている。

よってリサが誰かさえ判断できない死体を特定化し、その死に意味を与えていくことは重要な意味を持つ。リサの死者を思い出す行為を通して、マ・マ・ウーとミックの「生」は「記憶」され、意味を持つようになる。生存中マ・マ・ウーは亡き夫バ・バ・ウーの誕生日になる度に、火をおこし、バ・バ・ウーが嗜んでいたお酒やタバコを供え、神聖な煙をあの世界におくる儀式を行っていた。その儀式にリサも同行したことがある。死者を忘れずに「記憶」することは、亡くなった人の「死」と「生」に意味を与えることだ。またマ・マ・ウーが言うように、それは現在生きている人のためにあるものでもある。死者を忘れないよう「記憶」するのは、生きし者が必要とするからなのだ。

またリサにとって二人を記憶することは、ハイスラの文化を繋ぎ止め、引き継ぐプロセスでもある。なぜならリサは、ハイスラの文化を肯定し、熟知し、最後まで守ろうとした数少ない人たちであったマ・マ・ウーとミックから、その文化と世界観を継承するからである。

ミックは寄宿学校の生存者で、そのトラウマ的体験から先住民の権利獲得と社会正義のために戦い続けていた。立ち退きを強要された先住民女性をかばうために銃撃され、投獄されたり、政治活動中に妻を殺されたり、数々の精神的なダメージを受けてきた。心的外

傷後ストレス障害を思いながらも、戦う姿勢とユーモアのセンスを忘れないミックにリサは強く影響される。そしてミックから戦う姿勢を引き継ぐ。例えば、カナダ西海岸の先住民のカニバリズムは事実と異なると先生に歯向かい、ミックから教わった「くたばれ抑圧者よ」(“fuck the oppressors”)という歌を叫び続けたリサは、校長室までつれていかれることもある。ミックがリサに及ぼす影響を心配する親をよそに、リサはミックの戦う精神を引き継ぐことで自己肯定できるようになる。

マ・マ・ウーもミックと同様に、失われつつあるハイスラの言葉、文化、世界観を尊重し、ハイスラ語を話し、靈魂や死者の世界を最後まで守っていた。地域の薬草、木の実や果物、魚の処理の仕方、ウーリカン油の作り方⁴⁾、料理の仕方、摂取の仕方、ハイスラの伝統文化や生活様式についてリサはマ・マ・ウーから伝授してもらう。モンキー・ビーチに出没すると言いつた「毛深い猿のような生き物」ブグワス (B'gwus)⁵⁾の存在ももちろんマ・マ・ウーは信じていた。物語に登場する架空の存在にすぎないと思えるリサの父親は、ブグワスの物語を面白可笑しく作り変え、リサとジミーに語り聞かせるが、「たかが物語」だからと真剣に扱わないそのような父に対し、マ・マ・ウーは強い憤りを示す。そのような場面からは、マ・マ・ウーのハイスラ文化に対する強い思いとそれを固持しようとする意志が読み取れる。

しかしミックはクレージーなことをする「いかれてる人」、マ・マ・ウーは笑み一つこぼさない「冷たい魚」(348)と呼ばれていたことから、コミュニティの人から煙たがられていた存在だったことがわかる。それは二人が個人的に嫌われていたからではなく、同化政策のもと大半の人が主流の価値観で物事を評価するようになっていたからだ。主流社会の視点から物事を見る方が楽だと感じている人々にとって、その流れに抗ってハイスラの伝統的な慣習や世界観を守り続けようとするミックやマ・マ・ウーは面倒なのだ。リサはミックやマ・マ・ウーと、コミュニティとの狭間で揺らぎ続ける。

死者の世界に旅する物語—癒しと文化の継承

リサは長い間ミックとマ・マ・ウーの死の悲しみにくれている。しかし亡き二人と過ごした日々を振り返り、二人から学んだことを思い出すことで、ハイスラと主流の価値観の狭間で揺らいでいたアイデンティティに調和を見出していく。そして自身の持つ「もう一つの世界」とコミュニケーションがとれる特別の能力を受け入れられるようになる。

リサが靈魂の世界と通じるシャーマンの能力を持っていることに気づくのは、6歳のときである。野良犬の死を知らせに、「小さな男」がリサの前に現れる。それから何か不吉なことがあるたびに、リサの前にはそれを予言してくれる「小さな男」が現れるようになる。その真っ赤な髪をしたその「小さな男」は、リサの洋服ダンスに座っていることが多く、踊ったり、威嚇したりする。

マ・マ・ウーは、ブグワスの存在と同様に、リサのもとに姿を現す「小さな男」の存在も本当に存在するものとして信じる。またリサの持つシャーマンの能力も肯定する。それは誰もが持っているものではなく、遺伝的に引き継がれるものだとしてマ・マ・ウーはリサに説明する。実はリサの母も靈魂と通信できる能力を持って生まれるが、否定し続けたためその能力を完全に失ってしまう。リサが「小さな男」について話すと、リサの母はそれは

「現実のようにみえる夢」にしかすぎない(21)と、その存在を認めようとしない。また、ジミーの失踪後ジミーがモンキー・ビーチに立っている夢を見たとき母に伝えたとき、母はリサに抗鬱剤を飲ませようとする。このことから、娘の特別な能力を治療の必要とする病気としてとらえていることがわかる。リサの父親も同様である。リサが特別な能力を見せると、まるで娘が目の前でトプレスで踊っているかのような反応を示す。リサの友人チーズも気味悪がってリサを中傷する。霊魂と通信する能力を病的にとらえる周囲のこのような反応を受け、リサ自身も本当に霊を見たか疑うようになり、また、死を予言する「小さな男」に現れてほしくないと願うようになる。そして、とうとう「小さな男」はリサの前から姿を消してしまう。

リサの両親を含め、周囲の人がまったく信じないなか、マ・マ・ウーはリサの特別な能力を肯定し続ける。マ・マ・ウーの生存中、リサ自身なかなかその能力を肯定できるようにはならなかった。しかしマ・マ・ウーの心臓発作の知らせを受けたときに、突然悪いことが起きてしまうよりも、事前を知ることで心の準備をしたり、悪いことを予防できたりする方が良いと思うようになる。そして「小さな男」を追い払わなければ、マ・マ・ウーの焼死事故も、ミックの水死事故も、事前に防げたのではないかと自責の念にかられる。

だからこそジミーの遭難の知らせを受けたとき、それまでとは異なり、リサは積極的に「死者」とのコミュニケーションをはかり、「死者」たちに助けを求める。行方がわからなくなったという知らせを聞いた翌朝、ジミーが餌付けしていたカラスがハイヌラ語で「La'es—海の底まで行って」(1)とリサに伝えたことや、ジミーがモンキー・ビーチに立っている夢を見たことが、ジミーの消息を知る重要な手がかりだと考える。そこでジミーが消息をたった場所へボートで向かう際、モンキー・ビーチに立ち寄ることにする。

モンキー・ビーチへの旅は、「死者の世界」への象徴的・物理的な旅である。この「死者の世界」へのスピリチュアル・ジャーニーは、カナダ西海岸のハイヌラ族を始めとした先住民部族が行ってきた伝統儀式である。セーリッシュ族の人々の間では、病気や死は、魂が「死者の世界」につれていかれたために起こると考えられてきた。そこで病気を癒すために、「失われた魂」(“lost soul”)を取り戻す儀式を行った。シャーマンは「死者の世界」へカヌーで行き、「失われた魂」を取り戻して帰ってくる。文字通りカヌーを使う場合や、杉の板をカヌーに見立てて行う場合がある。リサの旅は、カヌーではなくモーターボートで行くため、現代版のスピリット・ジャーニーだといえる。

「死者の世界」であるモンキー・ビーチは、この世とは異なる次元に存在するのではなく、この世とあの世、現実と夢、神話、ヴィジョンが交わる場所として描出されている。このモンキー・ビーチは、伝説のブグワスが出没する場所としても知られている。かつて幼かったジミーは一獲千金を夢見て、その伝説の生き物を写真に収めようとしたことがあった。モンキー・ビーチで姉のリサとブグワスのシャッターチャンスを狙っていたとき、リサはそれらしきものを目にする。しかし当時は頭がおかしくなったと周りの人に思われたくないために、誰にも打ち明けることはなかった。

ジミーが失踪した今、自らの血と引き換えに、ジミーの居場所を教えてもらえるかもしれないと考えたリサは、モンキー・ビーチに立ち寄る。そこでリサが見るヴィジョンに、ジミーがジョッシュを何度も殺そうと試みるなか、船が難破し、沖に向かって泳いでいるジミーの姿がある。そしてそのヴィジョンは、この旅に出発する直前にリサが見つけたあ

る手紙から知った事実と繋がる。ジミーに一体何があったのか。それまで全く興味のなかった漁になぜ突然出ることにしたのか。リサは弟の部屋で見つけた手紙から、弟が、恋人であるカラオケを妊娠させた男に復讐するために、その男と漁にでたことを知る。その男とはカラオケの叔父ジョッシュであった。カラオケが叔父のジョッシュに当てた手紙には、少年と神父の写真に、少年の頭部にはカラオケの顔写真が、神父の頭部にはジョッシュの顔写真が貼り付けられていた。写真と同封されていたのは、「あなたの子供だから殺した」、「男の子だった」、と書かれたカード。それ以上の説明はない。しかしカトリック教会を主とした教会によって運営されていた寄宿学校で、神父の児童に対する性的虐待が横行していた事実が確認されていることから、カラオケがジョッシュの性的虐待の犠牲者であったことがここから推測できる。

リサはジミーを救いたいと思ってモンキー・ビーチにやって来るが、「死者の世界」に踏み入りすぎたりサは、逆にジミーとマ・マ・ウーに助けられる。ジミーには海底から引き上げてもらい、マ・マ・ウーには気絶しているところを助けてもらう。そしてこれ以上「死者の世界」に踏み入ると戻れなくなるから帰るよう促さる。「死者の世界」を後にするリサが最後目にするのは、ミックとマ・マ・ウーがこの「死者の世界」で楽しそうに踊っている姿である。マ・マ・ウーは生前、「死者の世界」は、「お腹を空かせている人も、痛みを感じている人もいない。一日中晴れわたっている場所。愛する人たちが皆いて、自分を待っていてくれる」場所、「みんな歌ってる。みんな踊って笑っている」(285)場所だと言っていた。リサが目にする「死者の世界」はその通りの世界であった。ミックとバ・バ・ウーも冗談を言って笑っている。楽しそうに踊っている。そしてハイスラ語で歌を歌っている。リサはハイスラ語が分からないが、ミックたちが歌っている歌が、自分に向けたお別れと再会を願う歌だということを理解する。

しかしこの踊りの輪のなかに、ジミーの姿はない。おぼれそうになったリサを海の中で助けてくれはしたものの、「死者の世界」にはいない。リサのヴィジョンの中のジミーも、沖に向かって泳いでいた。また、「死者の世界の人々」が、ジミーがリサに託したカラオケへのメッセージを、ジミー自身が「伝える」べきだと告げることからも、ジミーが生きることが示唆されている。

ジミーが生きているかもしれないということを知れたこと、ずっと会いたかったマ・マ・ウーとミックに会えたこと、そして何よりも、シャーマンとして「死者の世界」の霊魂と通信し、過去と現在、この世とあの世を繋げられたことで、モンキー・ビーチで目を覚ましたリサは、これまでまとまりのなかった世界に調和を見出す。小説最後の段落は、自分のアイデンティティと居場所を見出すリサの様子が、五感を刺激する言葉で次のように綴られている。

Early evening light slants over the mountains. The sky is faded denim blue. Somewhere above my head, a raven grumbles as it hops between the branches of the tightly packed trees. The crows have disappeared. Water splashes as a seal bobs its dark head in the shallows, hunting crabs. I lie on the sand. The clamshells are hard against my back. I am no longer cold, a b'gwus howls—not quite human, not quite wolf, but something in between. The howl echoes off the mountains. In the distance, I hear the sound of a speedboat. (374)

ここでは、神話の世界、物語の世界、現実の世界、ヴィジョン、過去と現在、すべてが時空を超えて一つの場所で、調和しながら存在している。エンバリーが指摘するように、「神聖な時（空）間と現代の時（空）間が調和しながら同じ次元に存在」する状態が提示されている（Emberley 122）。夕日に染まる山々と「ブルーデニム色に染まった空」が広がっている。地上では、ワタリガラスが「ゴロゴロ鳴きながら木の枝をびよんびよん飛び渡って」いる。海からは、アザラシが頭を上下させるたびに「パシャパシャという水の音」がする。太陽、山、海、空。ワタリガラス、アザラシ、カラス、カニ、クラムシェルはすべてハイスラの世界と生命の誕生やサイクルに欠かせない自然と生き物たちである。この物語でも象徴的な役割を果たしている⁶⁾。砂浜に横たわり、貝殻が背中に当たるのを感じながら、リサは遠くで鳴り響くスピードボートの音と、ブグワスの吠える声を耳にする。モーターボートという文明の利器、伝説上の存在と言われているブグワスの声、自然と文明、伝説と実在する世界が同格に鳴り響く。リサは、視覚、聴覚、触覚といった感覚器官に与えられた刺激作用を通して、外界の事物や事象をひとまとまりの有意義な対象として掴み取り、調和された世界と一体化しながらこの瞬間、存在し、生きていることをここでまさに体感し、知覚するのだ。

死者について語る物語—記憶と忘却

以上みてきたように、『モンキー・ビーチ』は、死者について語る物語である。リサが二人の死者たちを想起し、「死者の世界」へ旅することで、途絶えてしまったハイスラの文化と歴史を記憶し、リサ自身が見失っていた「魂」を取り戻す癒しの物語である。

そしてこの記憶するという行為、死者たちを忘れないでいるという行為は、見失った状態にある自分の「魂」を取り戻す癒しのプロセスには欠かせないものとして提示されている。この物語の中で、ハイスラ文化の英雄であるワタリガラスがいたずらをして、人間たちを「まやかす」ために目を覆って見えなくするエピソードが紹介されている（295-96）。それは「文化の爆弾」によって白人中心主義のレンズをかけられた、先住民の置かれた状況と同じである。寄宿学校制度をはじめとした先住民同化政策は、先住民の文化と世界観を忘れさせただけではなく、取り戻す価値のない不毛なものだという考えも定着させた。徹底的にダメージを受けた自尊心は、リサの親友が自殺するように、取り返しのつかない結果を引き起こす。『モンキー・ビーチ』では、ハイスラ族の人々、とりわけ自分たちの言葉と文化に価値を見出せないリサたち若い世代の人々が、自分たちの「魂」を取り戻すためには、途絶えた記憶を繋ぎ合わせる事が重要だと強調されている。かつてマ・マ・ウーが言っていたように、死者たちを記憶することは、いま生きている人のために必要なもの、いま生きている人に「癒し」をもたらすものである。死者を記憶する行為は、亡くなった人の「死」と「生」に意味を与えることであり、それは生きている人のためにするものなのだ。

さらに、死者たちを記憶する行為は、現在生きている者が能動的に行う必要のあるものとしても提示されている。リサは、ジミーの失踪事件の真相をパズルのように組み立て、失われた「記憶」と「魂」を取り戻す旅に出る。読者もリサと同じように、パズルのピースを繋ぎ合わせて読み進めていくことになる。しかしそれだけではなく、読者は、物語外

部からもパズルのピースを持ってきて、この物語と繋ぎ合わせるよう求められる。『モンキー・ビーチ』では推測にとどまっていたカラオケとジョッシュの関係は、実はロビンソンの別の作品、「クイーン・オブ・ザ・ノース」(“Queen of the North”)という短編で展開されている⁷⁾。叔父ジョッシュのカラオケに対する性的虐待は、カラオケが幼いときから始まり、カラオケの母親もそのことを黙認していたという衝撃的な事実がこの短編で明かされる。また、ジョッシュ自身が幼い頃、寄宿学校で性的虐待を受けていたということも明らかになる。そしてそのジョッシュが、自身がされてきたことと同じことをカラオケにしているという負の連鎖が浮き彫りになる。

よってジミーがリサに「間違いを正すためにでかけてくる」(39)と告げて漁に出かけていく小説冒頭に紹介される言葉は、ジミーが意図した意味よりも、そしてリサが『モンキー・ビーチ』で解明した意味よりも、さらに深い意味を持つことになる。ジミーの失踪は、復讐するという個人的な問題にとどまらず、家族、コミュニティ、そして社会全体の問題であり、植民地の歴史に深く根付いているということが読者によって解明されるのだ。

このように『モンキー・ビーチ』は、物語の主人公であるリサと同じように、読者の積極的な働きかけを促す語りの構造になっている。読者は、ジミーの真相を解き明かす作業と、死者たちの物語を繋ぎ合わせる作業を、リサと同じように行いながら読み進める。リサがジミーの真相を探る物語は、同時に「死者たちの物語」を探る物語でもあり、それは、忘却されつつある先住民族の伝統文化を引き継ぎ、記憶する物語でもある。その「記憶する」プロセスは、死者の記憶を過去の「犠牲者・被害者の記憶」としてアーカイブ化する「記録」としての「記憶」ではない。コミュニティ内外からは絶えずハイスラの伝統文化や世界観や寄宿学校の歴史を抹消しようとする圧がかかっている。忘却されないよう「記憶する」ためには、積極的な働きかけが欠かせない。リサの「死者について語る」物語、「死者の世界」に旅する物語、そして「死者」の記憶を引き継ぐ物語は、過去が実際どうであったのか、あるいはどうあるべきかではない。忘却から死者を蘇らす行為を読者と共有し、そのつどの現在において、死者たちの物語に耳を傾け、解釈し、現在を理解することで癒しと和解を求める行為なのだ。

注

- 1) 収容所の一つであったニューデンバー村の生存者の声は、ショートフィルム *Telling the Stories of the Nikkei* (New Denver BC, DVD, 2011) として地元の学生によって保存されている。
- 2) 体験者や生存者の声をアーカイブ化する動きと並行して、数多くの回想録や自伝的物語が出版され、教育推薦図書として学校教育で取り上げられるようになった。
- 3) “But the biggest weapon wielded and actually daily unleashed by imperialism against the collective defiance is the cultural bomb. The effect of a cultural bomb is to annihilate a people’s belief in their names, in their languages, in their environment, in their heritage of struggle, in their unity, in their environment, in their heritage of struggle, in their unity, in their capacities and ultimately in themselves. It makes them see their past as one wasteland of non-achievement and it makes them want to distance themselves from that wasteland. It makes them want to identify with that which is furthest from themselves; for instance, with other peoples’ languages rather than their own.” (Ngũgĩ 3)
- 4) ウーリカン (oolikan)、またはユーラカン (eulachon)。先住民からウーリカンと呼ばれるカ

死者について物語る

ナダ西海岸に生息するギンダラ。英語では“candlefish”と呼ばれるほど、脂肪が多い魚。この魚を七日間保存した後に茹でて浮上する油は、先住民の貴重な保存食として用いられてきた。栄養価が高く、交易品や保存食として重宝されてきた。

- 5) ブグワス、別名サスクワッチ、ビッグフット。カナダ西海岸の森の中に生息すると信じられている、身長2.75m、体重360kg、足の大きさ30cmくらいの猿のような生き物。『モンキー・ビーチ』では何度かリサが目撃する。またその鳴き声は「狼と人間の間」のようだと説明されている。“At night, very late and in remote parts of British Columbia, if you listen long enough, you sometimes hear him, his howl is not like a wolf’s and not like a human’s, but is something in between. It rings and echoes off the mountains. . . .” (318)。本当に信じる人もいるが、大半の人はスコットランドのネス湖で目撃されたネッシーのような未確定動物だと考えている。ビールなどの商品や観光地を宣伝するマスコットキャラクターとして利用されていたりもする。“B’gwus is famous because of his wide range of homes. In some places, he’s called Bigfoot. In other places he’s Yeti, or the Abominable Snowman, or Sasquatch. To most people, he is the equivalent of the Loch Ness monster, something silly to bring the tourists in. His image is even used to sell beer, and he is portrayed as a laid-back kind of guy, lounging on mountaintops in patio chairs, cracking open a frosty one.” (317)
- 6) 例えばワタリガラスはジミーに幸運をもたらしてくれ、悪いことが起こることを知らせてくれる。ワタリガラスはハイヌ文化の英雄で、最も力のある生き物である。光を世にもたらしてくれた存在でもあり、トリックスター的な存在でもあり、また人間の創造主でもある。
- 7) 「クイーン・オブ・ザ・ノース」はジミーがジョッシュと一緒に乗った漁船の名前でもある。

参考文献

- Emberley, Julia V. *The Testimonial Uncanny: Indigenous Storytelling, Knowledge, and Reparative Practices*. SUNY P, 2015.
- Ngũgĩ wa Thiong’o. *Decolonising the Mind: The Politics of Language in African Literature*. James Currey, 2005.
- Herman K. Haeberlin “Sbetetda’q, a Shamanistic Performance of the Coast Salish,” *American Anthropologist*, Vol. 20, No. 3 (Jul.-Sep., 1918), pp. 249-257.
- Robinson, Eden. *Monkey Beach*. Vintage, 2000.
- _____. *Traplins*. Vintage, 1998.
- Truth and Reconciliation Commission of Canada. Final Report. Web. 10 June. 2017.
<http://www.trc.ca/websites/trcinstitution/index.php?p = 890>
- キケロー著 『弁論家について』大西英文訳岩波文庫、2005年。
- 霜鳥慶邦「カナダ先住民の傷をめぐる政治と文学：Joseph Boyden、寄宿学校制度、カナダ真実和解委員会、2015年総選挙」、『言語文化共同研究プロジェクト』、2015、pp. 3-13。